

西久松吉雄展—日本画—古の贈り物

西久松吉雄 NISHIHISAMATSU Yoshio

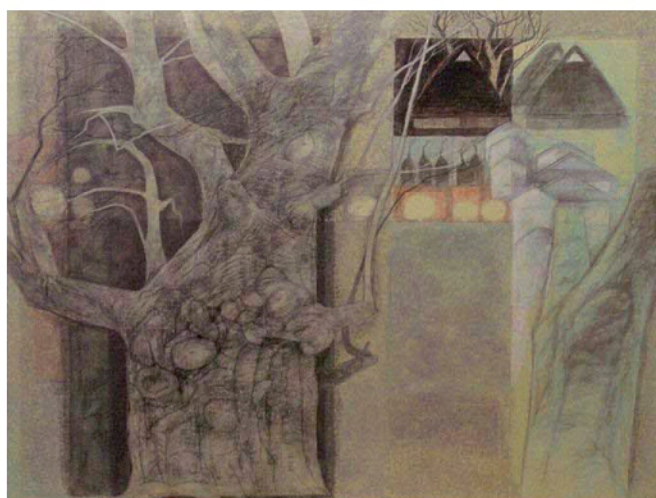
造形美術科 教授（日本画）



1



2



3

西久松吉雄展—日本画—古の贈り物

2007年2月20日～3月4日 ギャラリー三葉

滋賀県湖北地方の冬の季節は風雪が厳しく、大陸から寒風が流れ込み、樹木や草花、大地は耐え凌いでいます。湖面には竹生島があり、あぜ道には畦畔木^{けいはんぎ}が詩情をさそう風景を見せてくれました。

早春の木々が芽生えはじめた頃、素朴で質素な寺社を巡り歩き、そのたたずまいと周辺の自然を肌で感じ取る。また、風の冷たさと日射しの温もりを感じ、凜とした空気を吸い込む。

彼岸寺観音堂、西野の充滿寺薬師堂、石道寺、鶏足寺など湖北に多い十一面観音立像と出会うことも、場の風景を把握する方法のひとつでした。

地域で守り親しみのある寺社を中心にした里の伝習に思いを馳せる。そして歴史の息吹を感じ取ろうとする。樹皮のしわやキズを丹念に描く作業は、楽しく古の風景を思いながら克明に写し取る。子供達がかつてご神木の周りで親しく遊んだ光景を思いながら描くこともあります。また、遠い昔の戦国時代に地域の歴史を見守ってきたことも考えながら描くことも。

この地方の松は、枝先に行く程くねくねと曲がり、風雪に耐えた自然の美しい姿を見せてくれる。また盆梅も有名で長浜と浅井盆梅展があり、長浜盆梅展は1952年から始まり、湖北の山に自生する梅の古木を盆栽に育て上げた推定樹齢400年という「不老」という老木もあります。

「祈樹献花」「神樹献花」「湖北巡礼」に描いている櫟の樹は、湖北という風土に育まれ、「野神さん」と親しまれていました。親しみをもって守り継がれている樹木を中心に、願いと思いを込めて描いた3部作です。本尊と脇侍のイメージで描き、祈りを込め筆を走らせました。

- | | | | |
|---------|------------------------|------|--------|
| 1. 祈樹献花 | 80号F (112.0cm×145.5cm) | 2007 | 麻紙・岩絵具 |
| 2. 神樹献花 | 80号F (112.0cm×145.5cm) | 2007 | 麻紙・岩絵具 |
| 3. 湖北巡礼 | 80号F (112.0cm×145.5cm) | 2007 | 麻紙・岩絵具 |

「近江学」を学ぶ

本学では、社会状況や学生ニーズの変化に対応した魅力ある授業を展開するため、今年度から新カリキュラムを組み、実施しています。このカリキュラムの特長ある新科目の一つに「近江学」があります。近年、地域の再評価、地域からの発信ということで地域学がいつそう盛んになりつつあります。本学の所在する滋賀県も、琵琶湖や比叡山、信楽焼など全国的にも著名な自然や文化遺産が数多く守り伝えられています。しかし、それら以外にもいまだ充分には知られていない数多くの自然や文化資源を滋賀の地は抱えています。近江のもつ豊かで個性ある文化を再確認し、次代を支えていく学生たちに伝え、今後の創造的な活動に結びつけていくことが本学の果たすべき教育の一つである、という主旨のもとに生まれたのが新科目「近江学」です。

平成19年度は、本学教員3名以外に、特別講師として9名の方々にご講義をお願いしました。近江の歴史や芸術、民俗、自然など、さまざまな分野に及ぶ、幅広いテーマを設定しています。このうち、4回分については公開講座として一般の方々にも聴講していただきました。

芸術文化交流センター公開講座

「近江学概論」

第1回

本学学長 木村至宏

4月14日 本部棟三階ホール



平成19年度から開講される新科目「近江学」の初回ということで、この科目のコーディネーターでもある木村至宏学長に、その専門の立場から、近江の魅力を多方面から語っていただきました。まず、縄文遺跡の話から始められ、大津に残る古墳の跡、天智天皇の大津宮など近江の歴史的な特徴をヴィジュアルで紹介されました。その後、これから続く11回の講義の予告として、比叡山、里山、仏像、長浜、えり漁、鮎寿司、信楽焼、大津絵など幅広く近江の文化資源が解説され、近江の魅力が受講者に伝わりました。

(加藤)

「最澄と比叡山」

第2回

叡山学院 教授 武覚超

4月28日 本部棟三階ホール

日本仏教各宗派の祖師を輩出し、日本思想の母山とも言われる霊峰比叡山の思想について、その開祖伝教大師最澄の生涯を通して語っていただきました。講義いただいた叡山学院教授武覚超先生は比叡山の位置や歴史的背景などの概観から話をはじめられ、本論である伝教大師最澄の生涯と思想を残された文献をもとにわかりやすく解説されました。『叡山大師伝』が伝える最澄の誕生から、比叡山初登山の様子など有名な文献のくだりが紹介され、現在の根本中堂の基となった一乗止観院の創建、天台宗の開宗、入寂と遺戒まで、最澄の生涯を多くの文献を手がかりに説明いただきました。思想については、現在も叡山学園や比叡山の思想の根本となっている『山家学生式』の一節が詳しく紹介され、悟りを得るために菩薩が修行するその心得の理念を学生たちは大きくうなずきながら聞き入っていました。

(加藤)

「里山とスロー・ランドスケープ」

第3回

本学教授 大岩剛一

5月19日 本部棟三階ホール



本講義では、大津市仰木の里山を各地のニュータウンと比較しながら、人間が住む場所、ひいては「住むこと」の意味について考察し、地域学としての近江学の可能性を探る。豊かな森と棚田、多数の社寺、共同墓地と無数の地蔵、そして里山の生態系の一翼を担う家々。そこは鳥や虫、植物、人間と死者の魂が共に暮らす村でもある。ここには琵琶湖と里山をめぐる生命の循環、壮大な「命の水系」がある。そして、人と人、人と地域、人と自然が有機的につながり、自然界の循環と人々の宇宙観が重なるスロー・ランドスケープがある。

近代社会は普遍的で合理的なもの、定量化できるものに最大の価値を求めてきた。その結果、地域社会に固有の文

化が破壊され、生活様式が画一化し、知は多様性を失った。最大公約数的な思考が主流を占めるこの時代に、地域学は逆に、つつましい世界や小さな空間、ローカルな場所内に在する力（コスモロジーと豊かな想像力）を旗印に掲げる。それは、私たちの暮らしを覆う画一化（グローバル化）への最大の抵抗力となるはずだ。（大岩）

「大津京と紫香楽宮」

第4回

大津市歴史博物館館長 松浦俊和 6月2日 本部棟三階ホール



大津市歴史博物館館長の松浦俊和先生に、大津京と紫香楽宮という近江に残された2つの宮跡を、図表を眺めながらその遷都の理由を中心として語っていただきました。大津京についてはその位置や歴史の説明の後、防御説、積極的外交説、内政問題説など、遷都の理由についての考察が解説されました。その中でも、近江大津の地が渡来系豪族大友氏の本拠地であり、天智天皇が大和の地での他氏族との政争を逃れ、大友氏の支援を受けようとしたという内政問題説も有力な遷都の理由であると語られました。紫香楽宮については、聖武天皇の奈良時代、恭仁京・紫香楽宮・難波宮とわずかな時間に遷都がおこなわれたが、恭仁京と難波宮と平城京は中国の長安・洛陽・太原の三都制にならったのではないかとしたうえで、洛陽の郊外に竜門石窟寺院があるように、恭仁京に近い紫香楽に大仏を建立する計画があったという史実などについてご講義いただきました。（加藤）

「近江の画人①」

第5回

本学教授 小寄善通 6月16日 028教室

湖北の戦国大名浅井家臣の家に生まれ、桃山画壇の巨匠の一人に数えられる海北友松(1533～1615)について、これまでの研究成果と今後の研究課題について講義しました。

友松の代表作をスライドを用いて解説し、水墨画から金碧画に及ぶその作風の展開を示しつつ、彼の作風の特徴を指摘しました。また、友松はいまだ謎の多い画家で、62歳までの人生や画業については研究途上にあります。例えば、彼が若年時に師事したのは狩野元信か、あるいはその孫の永徳か、また、62歳以前の作品は残されているのか、といった点について、友松の初期作の可能性のある作品のいくつかを紹介し検討を加えました。また、当時画壇に君臨していた同時代の狩野派や、次世代にあたる狩野探幽にも彼が影響を与えていることを指摘し、友松の桃山画壇における存在の大きさを再確認しました。（小寄）

芸術文化交流センター公開講座

「琵琶湖の風景」

第6回

写真家 今森光彦 6月30日 本部棟三階ホール

今森先生には、自然と人間とが織り成す琵琶湖の風景のすばらしさについてご講義いただきました。川を遡上し田んぼに群れ泳ぐ鮒の姿、それを登校前に何匹も採ったこと、ところがダムなど水利環境の人工的な整備が急激におこなわれだしたところから、鮒が田んぼに來なくなったことなど、今森作品の原点といえるご自身の小学生ころの記憶から講義は始まりました。植物や魚、鳥、水、人が等価的に扱われている琵琶湖周辺の四季にわたるスライド作品では、自然と共生する人間の日常生活の豊かさをヴィジュアルに感じさせていただくとともに、近江八幡の水郷周辺の重要文化的景観指定の意義、ラムサール条約の問題点、内湖のヨシ原の重要性、自然水を利用した川端(かばた)の危機など、現在琵琶湖が抱える問題点も端的に指摘されました。人が琵琶湖とともに育んできた文化を見つめることで、人間が自然の一部であることを再確認し、大自然だけでなく最も人間に身近な自然である文化的自然環境の大切さを教えていただきました。（小寄）

「湖北の観音たち」

第7回

滋賀県立近代美術館学芸課長 高梨純次 7月22日 生涯学習センター

湖北は古代の仏像が集中して伝存していることで全国的にも注目される地域の一つです。高梨先生には、8世紀末から10世紀に造像された湖北の仏像の特徴とその像造背景についてご講義いただきました。鶏足寺の諸仏（木造薬師如来立像・木芯乾漆十二神将像）や日吉神社の木造千手観音立像など、奈良時代末期から平安時代前期にかけての仏像は、作風や技法に唐招提寺など南都の官営工房による仏像と共通する点が認められることなどから、当時の湖北の

仏像は官営工房との密接な繋がりのなかで像造されたと考えられるとのことでした。また10世紀になると、延暦寺中興の祖良源をはじめ、湖北と関係が深い天台座主の影響のもと、延暦寺根本中堂の本尊薬師如来像の写しと考えられる仏像や、天台宗で常行三昧をおこなう際に用いられる宝冠阿弥陀如来像が像造されるなど、湖北の仏像にも天台宗の影響が色濃く認められるようになるとのこと、時代によって異なる湖北の仏像の像造背景についてお話いただきました。

(小嵯)



「三井寺」

第8回

三井寺執事 福家俊彦

10月6日 生涯学習センター



三井寺執事の福家俊彦先生に天台寺門宗総本山といういわゆる権門としての三井寺ではなく、中世から近世に宗教的結界としてアジュール性をおびた別所を含む三井寺について語っていただきました。三井寺は三院五別所と呼ばれ、本山三井寺の三院の他に、近松寺をはじめとする五つの別所を含んでいたこと。別所においては、三井寺という宗教的権威に保護され、その時々権力者の力が及ばないア

ジュールのような機能があり、自由な宗教活動や民間芸能が発展したこと。特に近松寺においては「説教節」や「踊念仏」が考案され、街道を通じて全国に広がり、庚申講や大津絵の発展などもその場に見られたことなど、詳しく解説いただきました。一方で民間芸能の研究は、現存する文献が極端に少なく、想像の域を超えない部分が非常に多いということなど、この分野の研究課題も話されました。(加藤)

芸術文化交流センター公開講座

「里山と水の文化」

第9回

滋賀県知事 嘉田由紀子

10月20日 本部棟三階ホール



滋賀県にとってかけがえのない琵琶湖との共生。それがいつごろからどうして失われてしまったのか、そしてそれを取り戻すために、自然の一部でもある人間として私たちが今すべきことは何か。嘉田先生には、琵琶湖の水を中心とした環境問題を語っていただきました。これまでの滋賀県下や世界各地におけるフィールドワークをとおして、滋賀の地が「狩猟採集時代、農耕時代、工業時代、情報時代」と、人類の歴史の多様性が凝縮された世界的に珍しい地域社会であることに気づかれた経緯に始まり、自然との共生のキーポイントが「もったいない」という日本文化特有のことばに凝縮されること、また地球温暖化が琵琶湖にも既に影響を落とし始めていることなど、大きな環境問題を生活に直結した分かりやすい視点からご講義いただきました。

(小嵯)

「信楽焼の美」

第10回

滋賀県陶芸の森学芸員 大槻倫子

11月17日 生涯学習センター

本講義の特別講師は、信楽にある滋賀県立陶芸の森美術館で、数々の展覧会を企画されてこられた主任学芸員の大槻

倫子さんです。今回は日本を代表する陶器産地のひとつである信楽の歴史と特色を、各時代順にスライドを交えて詳しく講義していただきました。信楽は常滑、瀬戸、備前、丹波と共に、中世より続く窯〈中世六古窯〉のひとつに数えられます。信楽では古くからやきものに適した良質の土が大量に産出され、地理的にも京の都に近いことから、陶芸の産地として重要な位置を占めてきました。そこから生み出される陶器は、都の人々の生活道具、文化に深く関わり続けてきました。その始まりは13世紀末といわれ、その中でも室町期から江戸期にかけて信楽焼きは、侘び茶の茶人たちによって茶道具として用いられ、表舞台に登場することになります。その後登り窯の導入によって生産量が増大し、一大窯業地として発達していきます。現代でも多様なやきものが作られる信楽が、身近に感じられる講義でした。

(辻)



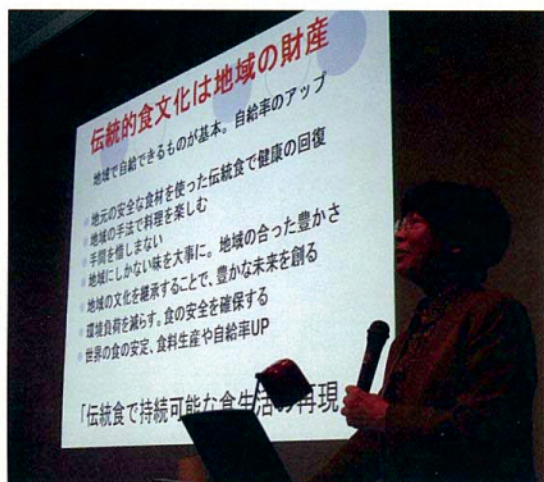
芸術文化交流センター公開講座

「近江の食文化」

第11回

滋賀大学教授 堀越昌子

12月1日 本部棟三階ホール



「地域の伝統食はやはりその地域の風土と結びついていて。特に気候との関係が深く、日本ではアジアモンスーンの影響を受けていると考えられ、モンスーンは夏の高温多湿が特色で、豊かな発酵食品を作り出した。ここ近江は、豊富な水と平野に恵まれ米とを利用した発酵食品、フナ寿司が有名である。」このように、本講義で堀越昌子先生は近江の食文化の特色を的確に解説されました。また、本学が位置する仰木に伝わる「スノウ講」という伝統行事に欠かせない納豆もちの話も聞かせていただきました。伝統食は飽きることがない。飽きないから伝統食となる。飽きない食べ物はその人の体に良い食べ物であるといえると、堀越先生の栄養学が熱く語られました。

(加藤)

「近江の画人②」

第12回

彦根城博物館 石丸正運 12月15日 高島市藤樹の里ふれあいセンター内ふじのきホール



高島市と本学が文化協定を締結することを記念して、その調印式とともに文化講演会という形式でこの講義が開催されました。講師をご担当いただいたのは彦根城博物館館長で、元滋賀県立近代美術館館長でもある石丸正運先生で、高島市とゆかりのある狩野山楽、岸竹堂という画人について語っていただきました。石丸先生は著書に『近江の画人たち』があり、その中で取り上げた内容を多くのスライドで紹介しながら話されました。その中で、湖北地方の湖上の安全を見守る海津天神社に山楽が奉納した絵馬の詳しい解説があり、高島市の貴重な文化財の一端がうかがえました。

(加藤)

文：大岩剛一（デザイン科教授）

小嶋善通（人間学講座教授）

加藤賢治（教学課長）

辻喜代治（人間学講座教授）